

ISSN 2186 – 3989

オンライン日本語教育での課題に対する学習者の意識調査
－社会につながる日本語教育の実践からの考察－

横田 隆志

A survey of learners' awareness of tasks in online Japanese language
education

Takashi Yokota

北 陸 大 学 紀 要
第52号(2022年3月)抜刷

オンライン日本語教育での課題に対する学習者の意識調査 — 社会につながる日本語教育の実践からの考察 —

横田 隆志*

A survey of learners' awareness of tasks in online Japanese language education

Takashi Yokota*

Received December 15, 2021

Accepted January 19, 2022

Abstract

In this survey, I was able to clarify from the questionnaire survey what level of awareness students had when working on tasks in classroom activities.

Due to the coronavirus, I conducted activities to enable learners to interact with people outside the classroom and connect online with society in Japan including international students who cannot enter Japan. However, I began to wonder if classroom activities that seemed to be connected to society might not actually be connected to society. Learners interact with people outside the classroom, but is there a sense of "relationship with society"? Although classes were connected outside of the classroom, I was wondering if the learners were conducting classroom activities with the aim of "connecting to society." Online Japanese language education is also connected to society, but learners are mainly interacting with teachers, and are they aware that they are involved in society?

I was able to clarify from the questionnaire survey the level of awareness we were working on regarding issues in the classroom activities. As a result, it became clear that the learner's consciousness was inside the classroom. Although it seems that they were trying to get involved outside the classroom, the main purpose was to receive credits and improve their Japanese proficiency, and many learners did not have much awareness of "connecting with society."

Key Words : Connection to Society, Online Japanese language education, International students who have not entered Japan, Learners' awareness of tasks

はじめに

言語教育の主体が教師から学習者へと移り、教師の役割は接触場面における自律学習支援へと変化している。また、言語学習も社会文化的アプローチに則って行われるようになり、言語教育は「ことばによって活動する」場をつくること（細川他, 2016）にシフトしている。このような背景から日本語教育でも社会との関わりや社会への参加を目的とした教育（佐藤・熊谷, 2011）が重視されはじめており、そのような日本語教育活動や実践研究が増えてきている。

しかしながら、このような社会とは一見つながっているような教室活動は実際の社会にはつながっていないのではないだろうかと考えはじめた。確かに、学習者は教室外の人々との交流をしている。しかし、その活動で学習者は社会と関わろうという意識はあるのだろうか。学習者は教室外の人々と関わってはいるが、学習者が「社会につながることを目的としながら教室活動を行っているのか」について疑問を感じた。これは、教育機関の中で多くの学習者がテストの点数や成績を意識しており（佐藤・熊谷, 2011）、教室活動で教室の外とつながっていてもその活動の過程が教師に「評価」されていることを学習者は意識しながら課題を行っている場合が多いからである。学習者に「社会につながる」という意識がなければ、その教室活動は「社会に参加している」活動とは言えない。

コロナウイルスの感染拡大の中、日本に来ることのできない「未入国留学生」¹に対してオンラインでの日本語教育を行うことになった。彼らは日本には住んでいないが、日本社会に関ることができるようオンラインでの「社会につながる日本語教育」を行った。ここでは、社会とのつながりを目指し、学習者が日本に関わる教室活動を行ったが、学習者の活動は教師とのやり取りが中心になっていたように感じた。また、課題に対しても積極的に取り組んでいたが、学習者は教室活動を通じて、社会につながろうという意識はあったのだろうか。

そこで、本研究ではオンラインでの「社会につながる日本語教育」での課題に対する学習者の意識についての調査を行った。学習者は教室活動での課題についてどのような意識を持ちながら取り組んでいたのかを授業の省察とアンケート調査から明らかにする。

1. 社会につながる日本語教育

近年、日本語教育では社会につながる教育が意識され、さまざまな実践報告が行われている。ここでは実際に教室活動において社会に関わり、社会を変え、そのプロセスについて考察するような活動が行われている。

佐藤・熊谷（2011）は、日本語教育の問題点として、日本人の話す日本語をモデルとした日本語教育、教師や教科書の持っている力、学習という概念の捉え方を挙げ、それらの問題を解決するために日本語を使って社会に関わることに焦点を当てた教育について提言している。そして、社会に関わり、つながり、働きかけるような社会参加を目指した日本語教育の実践を行っている。社会参加を目指した外国語教育では、「学習者を社会の責任ある一員」とし、学習者の自己実現を目指している。そして、このような社会とつながっていくような活動がさまざまな工夫から行われており、その実践内容も紹介されるようになった（西俣他, 2016）。

また、當作（2013）は外国語教育の目標を「分かる・使える」という領域だけではなく、グローバル社会の領域において「つながる」能力の育成が必要であると述べている。言語

学習において、単に言語を習得するのではなく、社会のネットワークに積極的に関り、その社会の問題を解決する。そして、このような活動こそがグローバル社会を生き抜く知識、能力、資質の育成にも役立つとしている。

そして、トムソン（2016）は、日本語教育を「社会的な営み」であると捉え、知識を使った日本語教育は社会や世界の日常の繰り返しの積み重ねとしての歴史の中で、人とつながり、組織とつながり、外部の活動とつながり、その活動を通じて多くの出来事が起こっていると述べている。そのうえで、社会文化的アプローチの理論から日本語のコースを実践コミュニティとし、社会・コミュニティへの参加を目指す日本語教育の理念からの「つながる」ことを意識した日本語教育の実践を行っている。

このように、日本語教育では、教室内で学習者の個人的な言語能力の向上だけを目指すのではなく、教室内外のコミュニティに積極的に関わり、教室外の人々とのやり取りを通じて、「社会とつながる活動」に変化している。そして、このような社会参加の日本語教育を行うことで、批判的な視野を持った学習者を育成することができるのである（佐藤・熊谷, 2011）。

2. 未入国留学生

2019年に中国・武漢市で発生し、世界に広がっていった新型コロナウイルスの感染拡大が、日本への留学を希望していた学習者の学びに大きな影響を与えた。2020年10月に一時的に入国が許可されたが、2020年の3月からの1年間は断続的に日本への入国制限が続いた²。日本への留学を待っていた学習者は先の見えない状況に不安を抱えながら日本語の学習を続けていた。日本への留学を希望しながら、それが叶えられずにいる留学生はどのような気持ちで日本語学習に取り組んでいたのだろうか。

このような状況で来日を予定していた留学生に対して、日本の大学ではオンライン授業を行い、学習の継続を保った³。そのため、大学に入学や編入はしているが、実際には日本に入国できない未入国留学生が世界各国に現れた。彼らは日本の大学に所属しているものの日本に来ることができないために、オンラインによる授業を受講し、学びを継続させていたのである。このように大学ではオンラインでの受講の機会を設けることで、所定の単位を取得できるようにしていた。ただ、このような未入国留学生は本来ならば来日し、留学生として日本に滞在しながら大学で学んでいるはずであった。確かに、オンラインで大学の授業を受講し、単位を取得できるシステムを利用することができたが、留学の醍醐味はただ単に大学で学ぶことや単位を取得するだけではない。留学によって、目標言語が日常的に使用されている場で実際に言語をコミュニケーションのツールとして利用する。そして、自国で学んだ日本語や日本についての知識を使いながら日本社会で生活し、自国では体験することが難しい「新しい日本」について体験をする。このような日本語の使用や日本社会の体験から日本の多様性を学んだり、日本文化に触れたりしながら異文化理解を行っていくことができるのである。日本での生活を通じて、日本の社会を体験し、日本の社会に関わっていくことが多くの留学生にとって留学の目的となっている場合も多いのではないだろうか。しかし、日本での生活をするのができない未入国留学生にとっては、オンラインでの大学の授業を通じて日本社会に関わり、日本社会につながっていくことは非常に難しい。つまり、未入国留学生は来日することができないためにこのような「日本社会につながる」体験をする機会がないまま大学の授業をオンラインで受講していたのである。

3. 実践活動

このような背景から、オンラインでも日本に関わり、日本社会につながるような日本語教育ができないか考え、オンラインでの「社会につながる日本語教育」を行った。本実践は2020年の秋 Semester である2020年9月～2021年1月（全15回）の日本語の授業（会話）で行った。参加者は、北陸大学2+2編入4の未入国留学生34名、日本人ボランティア1名(Aさん)、授業担当教員1名であった。授業は、TEAMSを使用したリアルタイム・オンライン（1週～8週）、オンデマンド・オンライン（9週）、リアルタイム・オンライン（10週、11週）、対面（12週、13週）、リアルタイム・オンライン（14週、15週）で行った。授業の内容は以下の表1のとおりである。

表1 授業内容

週	内容
1	オリエンテーション（全体）
2	コミュニティについて（グループワーク）
3	日本についての知識（グループワーク）
4	日本のいいところ、悪いところ（グループワーク）
5	日本の悪いところはどうかしたらいいか（グループワーク+日本人ボランティア）
6	留学生からの提案を考える①（個人・グループワーク）
7	留学生からの提案を考える②（個人・グループワーク）
8	留学生からの提案を考える③（個人・グループワーク+日本人ボランティア）
9	発表について（個人）
10	発表準備①（個人・グループワーク）
11	発表準備②（個人・グループワーク）
12	発表・ディスカッション①（グループ）
13	発表・ディスカッション②（全体+日本人ボランティア）
14	発表・ディスカッション③（グループ）
15	まとめ（全体・グループ）

本実践では、学習者が日本の社会について調査し、日本人や日本に住んでいる人々と関わり、「留学生の視点から日本に提言する」ことを通じて「日本社会につながる」ことを目的とした。

学習者は中国の大学で日本語を専攻しており、そこでは日本についてのさまざまな情報を得ていた。日本事情や日本概況などの「日本について学ぶ」授業や日本語学習のための「間接的に日本についての情報を得る」授業から意識的、無意識的に日本についての情報を得ていた。また、大学以外の場所でも日本についての知識を得る機会は多かったと思われる。例えば、高校までの科目としての「歴史」の中で学んだ日本のイメージ、ドラマや映画などから得る日本人像、ニュースや新聞からの情報である時事的な日本の情報などで

あり、それらから日本についての知識を得ていたことが推測できる。さらに、34名中22名は実際に日本を訪問したことがあり⁵、短期間ながらも実際に日本で生活をした経験からの日本についての知識もあった。そのような日本についての情報や知識から「日本の問題」を発見し、その問題について、日本に住んでいる留学生、日本人やクラスメートと話し合いを行う。そして、留学生の視点からその問題を解決する方法を提案することで「日本社会につながる」ことを目指した。

クラス開始時には、このクラスでは日本についての問題を解決する方法を考える過程で、日本に住んでいる人、日本人、クラスメートと交流をし、「日本社会とつながる」ことが目的であることを強調し、説明した。そのため、学習者とはあまり関係のない日本社会ではなく、これから日本で生活をする一市民として、日本を自分自身と直接関りのある日本社会として捉えることを意識してほしいと伝えた。また、「留学生の視点から日本に提言する」際には実現可能かどうかを考える必要があることも伝えた。そして、この活動はグループワークではなく、各学習者が主体的に自分自身で問題を発見し、解決する活動であることも伝えた。ただ、問題を発見、解決する過程でクラスメートとの意見交換をしながら活動をするクラスであることも説明した。2週目は、日本での生活をイメージするために、「所属しているコミュニティ」について考える活動を行った。最初は「コミュニティに所属している」という意識はあまりなかったが、大学、寮、さらには中国社会との関わりについて、クラスメートとの対話を通じて所属するコミュニティについての気づきがあったようだった。3、4週目には学習者にとっての日本はどのようなものかを考える活動を行った。そこでは日本の「良い点」と「悪い点」について考えた。学習者が考える日本の良い点や悪い点はステレオタイプの日本や日本の社会について述べられたものだった。その日の課題として、学習者が考えた「日本の悪い点」が果たして日本にとっての問題点かどうかを日本に住んでいる人や日本人に質問をして、日本の問題について考えることを行った。5週目には各学習者が課題を通じて考えた「日本の問題点」についてグループで話をした。学習者は、自分自身が考える「日本の問題点」を挙げ、その根拠について述べた。その際にボランティアで参加した日本人のAさんにコメントをしてもらい、Aさんにとってはそれが問題かどうかを学習者と共に考える活動をした。そこではAさんにとっては問題ではないと感じることやなるほどと思うような問題が挙げられていた。6週目から8週目は学習者が考えた「日本の問題」をどのように解決したら日本がよりよいコミュニティになることができるかを考える活動を行った。小さなグループに分かれて、学習者が考える問題について口頭での意見交換を行った。その際に、グループ内でコメントをし、お互いに考える機会を設けた。8週目の課題として「日本の問題をどのように解決するか」を説明するためのレジュメを作成した。その課題に対して、担当教員と日本人ボランティアAさんがコメントをした。9週目は留学生が入国できるようになったためにオンデマンドで「発表について」の説明をした。また、8週目の担当教員と日本人ボランティアAさんのコメントや日本に住んでいる人、日本人との交流を通じて考えたことから再度「日本の問題を解決する方法」について考える時間にした。10週目と11週目は日本に入学したあとの隔離期間だったためオンラインでの活動を行った。各学習者が考えた「日本の問題についての提言」をするためにどのように説明するかをグループに分かれて話し合いを行った。そして、11週目の課題として音声を入れたPPTで「日本社会に対しての提言」のプレゼンテーションを作成した。また、このプレゼンテーションを12週目までに見ることも課題とした。学習者が作成したプレゼンテーションはそれぞれ興味深い内容であった。また12週目は初めての対面授業だった。まずはグループに分かれて簡単な自己紹介を行い、プレゼンテーションの内容についてお互いにコメントをする活動を行った。20分のグループ活動をそれぞれ3回行ったため、多くのクラスメートと交流をすることができていた。クラス

活動としては 12 回目であったが実際に会ったのは初めてだった。学習者同士が実際に会ったのは初めてだったにもかかわらず、グループ活動は盛り上がっていた。13 週目は各学習者のプレゼンテーションについて日本人ボランティアの A さんがしたコメントについて考えた。また、担当教員が各学習者のプレゼンテーションについて「個人的に」感じたことを述べた。14 週目はコロナウイルスの感染者が学内で出たために再びオンラインによる授業であった。学習者が提案したことについて再度、考え、その考えたことについてグループで話し合いを行った。また、15 週目もオンラインでの授業であった。授業のまとめとして、この活動を通じて考えたことについてクラス内で発表した。そこでは以下のようなコメントがあった。

- ・日本に来たことで初めて「本当に」日本にかかわっていると感じる事ができた。
- ・中国にいて、日本に住んでいないのに日本にかかわるのは難しかった。
- ・なんとなく日本とのかかわりはあったように感じる。
- ・プレゼンテーションが上手にできてうれしかった。
- ・日本人は先生と A さんとしか関わることができなかった。
- ・日本語の能力がアップした。

以上のように、この活動では教室外の日本人や日本に住んでいる人とのコミュニケーション活動を行うこと、また、実際に学習者が日本社会につながることを意識しながら参加することを常に確認しながら行われた。しかしながら「社会につながる」という意識は本来にあったのかはよく分からなかった。ただ、「留学生の視点から日本に提言する」という目的は達成していた。また、来日してからは日本に住んでいたということもあり、「日本につながる」という意識は強くなっていた。

4. 省察からの学習者の社会に関わる意識

4-1 省察の方法

今回の実践では、日本の社会について調査し、日本人や日本に住んでいる人々と関わり、日本の問題について「留学生の視点から提言する」ことを通じて「日本社会につながる」ことを目的とし、課題を行った。そこでは学習者は具体的にどのような意識で課題に取り組んでいたかを実践の省察を行いながら分析をする。

分析には、「授業用 PPT」、「学習者のジャーナル」、「実践者のフィールドノート」を使用し、そこに記述してある文章から考察する。授業での PPT は、毎回、キーワードになったことが記録されており、毎回の授業でどのようなことを意識させようとしていたのかが分かるために分析に使用する。「学習者のジャーナル」は、学習者が授業終了後に教室で考えたことや行ったことを記録するために作成をした。そこには学習者の意識が書かれているため、分析の材料としては適していると考えられる。またフィールドノートについては毎回の授業で担当教員が授業中に感じたこと、学習者のジャーナルを読んで考えたこと、その他の気づきについて毎回まとめたものである。ここからも学習者の意識について担当教員がどのように感じていたかが分かるために分析に用いる。

まず、「授業用 PPT」の中に含まれる「社会にかかわる」ことに関係のある文章を取り出し、どのくらいの頻度でキーワードとして、学習者に提示をしていたかを分析する。そして、「学習者のジャーナル」では、学習者が「授業で感じたこと」、「気づいたこと」、「考えたこと」を記録したコメントを取り出す。その中で活動のまとめりである 5 週目、8 週目、

13 週目のコメントの内容について分析を行う。そして、担当教員のフィールドノートから「社会にかかわる」ことに関するコメントを抜き出し、担当教員が学習者の意識について考えたことから分析を行う。

4-2 授業用 PPT

まずは、授業用の PPT に書かれている文から「社会に関わる」ことに関する文を抜き出す。毎回の課題の説明で「社会につながる」ことを意識させるためにキーワードとして使用するようしていたが、どのような頻度で使用されていたのかを分析する。結果は以下の表 2 のとおりである。

表 2 PPT の「社会に関わる」キーワード

週	内容
1	日本の社会につながるにはどうしたらいいか。 実際に日本で生活することをイメージする。
2	自分のコミュニティにはどのように関わっているか。 日本に来た時にどのようなコミュニティに参加しているか（したいか）。
4	自分自身の問題として考える。
5	自分自身の問題として考える。 このタスクを通じて日本社会に関わる。
6	自分だけではなく日本で生活をする人のことも考える。
8	解決することで日本で生活をする人みんながよくなる提案をする。
15	このタスクを通じて日本社会につながる事ができたか。

1 週目ではクラスの活動についての説明があったために「日本社会に関わる方法」や「学習者が日本に関わる姿をイメージさせる」という授業の目的や活動内容についての説明で「社会につながる」ことを意識させるキーワードとして使用されていた。2 週目はどのようなコミュニティに参加しているか、来日後にはどのようなコミュニティに参加しているかをイメージするために使用していた。4, 5 週目は「日本の問題を考える」タスクを行ったので、その問題を「日本で生活することをイメージ」して問題を自分自身のこととして考える作業で使用していた。6 週目では、個人的な問題から日本全体の問題として考察するために使用している。そして、8 週目では、学習者が考えた問題を日本全体の問題として捉え、それを解決することでコミュニティがよりよくなることを考える課題のために使われていた。最後の授業では、クラス活動を行って、社会につながる事ができたかを振り返る作業で使用されていた。

毎回の授業での課題を行う際に、どうしてその課題を行うのかを意識させるために「社会に関わる」ことを意識させながら行っていたことが分かった。しかしながら、学習者が発表を行った週とそのことについてさらに考える週である 7, 8 週目では「社会に関わる」ことに関することばがキーワードとしては使われていなかったことが分かった。また、クラスの前半では毎回の授業で「社会につながる」ことを意識づけようとしていたが、後半

の授業では PPT の中のことばには見られなかったことも分かった。

4-3 学習者のジャーナル

学習者のジャーナルに書かれていた文章を文ごとに切り取り、その内容について考察した。その際に、一つの文に複数の内容があるものはそれぞれを別の内容として作成した。それぞれの内容について分類し、さらに大きなテーマで分類した結果、「社会に関すること」、「言語学習に関すること」、「伝達能力に関すること」、「教室活動に関わること」に分けることができた。それを以下の表 3 にまとめた。その中から、活動としてのまとめの週である 5 週, 8 週, 13 週のジャーナルに書かれた内容がどのようなものだったのかを考察した。

表 3 学習者のジャーナルに書かれていたテーマの数

週	社会	言語学習	伝達能力	教室活動
5	27	15	0	11
8	14	12	7	22
13	5	18	28	21

5 週目のコメント例

- ・日本をよくするために考えた。(社会)
- ・日本に住んでいないので考えるのが難しかった。(社会)
- ・だんだんと日本語を使って交流することが楽しくなった。(教室活動)
- ・日本語がもっと上手になるといい。(言語学習)

8 週目のコメント例

- ・日本の問題点を留学生の視点から考えることができたと思う。(社会)
- ・日本人にとっても便利なものはたくさんあった。(社会)
- ・日本語能力がアップした。(言語学習)
- ・日本にないものを日本人に伝えるのは難しい。(伝達能力)
- ・コメントをもらえることはいつも嬉しい。(教室活動)

13 週目のコメント例

- ・日本に住んでいると問題発見と問題の解決はもっとしやすい。(社会)
- ・自分の考えを日本語にするとき合っているか心配だ。(言語学習)
- ・発表が上手にできた。(伝達能力)
- ・発表する能力が向上したと思う。(伝達能力)
- ・オンラインでの発表だったので緊張しないで発表できた。(教室活動)
- ・日本人に褒めてもらってうれしかった。(教室活動)

5 週目の活動では「社会に関わる」ということを意識したコメントが多かった。これは教室活動の目的が「社会につながる事」であるということが意識されていたからだとと思われる。そのため、学習者は実際に日本に住むことを意識しながら問題を見つけようとしていたことも分かった。また、オンラインでの授業ではあったがクラスメートと交流しな

がらの教室活動は楽しかったようである。ただ、初めて話す人とはなかなか打ち解けないことや対話にあまり参加しない人と話すことは嫌だと感じていたコメントもあった。そして、この活動を通じて日本語能力も向上できると考えていた学習者も多かった。

8週目の活動では、教室活動について考えたコメントが多かった。これは、6、7、8週目は教室での交流活動がメインだったためであると考えられる。日本人の立場からも考える作業をしたため、日本社会について考えたことも多く、日本社会に関わるコメントも多かった。また、活動を通じて日本語能力の不足点を感じ、それを克服したいというコメントもあった。

13週目は、プレゼンテーションの内容について日本人ボランティアと担当教員がコメントをしたので、PPTを作成することや発表することに意識があったようである。そのため、ここでのコメントでは社会に関わることに關するものが少なかった。学習者の意識としては発表することが今回の授業のまとめであると考えていたからであろう。一方、日本に来て、日本に住み、対面で授業に参加することで日本に関わるという意識を改めて持った学習者もいた。

表3を見ると、最初は「社会」に関するコメントが多かったが、次第に少なくなり、13週目では5つしかなかったことが分かった。授業の最初の頃は「社会につながることを意識していたが、発表することが教室活動のメインになるにしたがって、学習者の意識が、「言語学習」、「伝達能力」、「教室活動」へとシフトしていったことが分かる。もちろん、それぞれの週での活動が学習者のコメントに反映される可能性は自然と高くなるが、学習者の意識が「社会」から離れていく様子が見られた。

4-4 フィールドノート

授業担当教員のフィールドノートから「社会に関わること」について考えた文章を抜き出し、それを時間的な流れに沿って整理し、分析を行う。

- ・日本に来ることができない学習者が「日本に関わる活動」を行うためには15回の授業で学習者に気づきを促すことが必要である。(1週目)
- ・自分自身がコミュニティに属していると意識している学習者は少なかった。(2週目)
- ・日本で生活することは未入国留学生なので意識としては強いが、やはり日本に住んでいないとイメージするのは難しい。(2週目)
- ・やはりステレオタイプの日本像があり、そこから日本の問題を考える。しかし、「自分が考える日本」を明文化することでこれから日本社会についての考えが変わる可能性がある。(3週目)
- ・先週考えた、ステレオタイプの日本について日本にいる人や日本人と交流を通じて、本当にそうなのか確認をする作業をした。しかし、あまり変化がなかった。交流はどのようにしたか気になる。(4週目)
- ・来週は日本人ボランティアが来てくれるので、そこで何か考えが変わる(気づきがある)といいなと思う。(4週目)
- ・日本人ボランティアのAさんのコメントが「正しい日本」や「正しい問題」になってしまった。やはり多くの日本人のコメントが必要である。(5週目)
- ・「日本社会をよくするため」というコメントが学習者のジャーナルにあった。日本に関

わる意識はまだある。(5 週目)

- ・グループ活動をすることがメインの活動になっている気がする。「実際に日本に住むこと」をもう少し意識させる必要がある。(6 週目)
- ・「自分自身の問題」として考えることはできているような気がする。ただ、学習者個人のメリットが多い。(6 週目)
- ・学習者が考えた問題や問題の解決は日本に住んでいる人にもメリットはあるか考えたが、そこはあまり意識できなかったようである。(7 週目)
- ・日本人ボランティアのコメントからどのように考えたか気になる。(8 週目)
- ・私以外の人が教室活動に参加するのはいいが、結局、「新しいもう一人の先生」になってしまっているのだろうか。(8 週目)
- ・実際に日本に来たが、外出できないので実質、中国で受講していた時のオンライン授業と学習者の雰囲気は同じだった。社会に関わる意識は日本に来るだけでは変化しないのだろうか。(10 週目)
- ・課題をこなすことがメインの活動になってしまった。もう少し、「日本に関わる」ことを意識させるにはどうしたらいいか。(11 週目)
- ・プレゼンテーションの内容はいいが、現実性はあまり高くなかった。(12 週目)
- ・初めての対面授業で「日本に住んでいる意識」は高くなった。ただ、自分たちとの関わりよりも発表についてのみ考えているような気がする。(12 週目)
- ・日本人ボランティアと担当者の 2 種類のコメントがあった。違う視点からのコメントでそこに日本人の多様性についても気づいていた学生がいた。(13 週目)
- ・発表が終わったのでリラックスしている。やはり発表することが課題だったのだろうか。(13 週目)
- ・発表について「日本社会に関わる」ことを再度考える活動であったが、発表が終わったので特に意識的に活動をしている感じがしなかった。これはオンラインでの授業に戻ってしまったからなのだろうか。(14 週目)
- ・振り返りのコメントでは「日本社会に関わる」意識が見られた。ただ、日本語能力や発表が上手にできたというコメントが多かった。(15 週目)
- ・実際に日本に住んでいた場合は学習者の意識は変化したのだろうか。(15 週目)

それぞれのコメントをまとめると以下のようなものになる。

学習者は日本にいないが「社会につながる」意識を持てるように工夫しながら授業に取り組んでいた。学習者は日本に来ることが決まっているために活動には積極的と感じているようであった。ただ、日本に住んでいないために実際の問題点を発見するのは難しかった。学習者に日本人との交流を通じて「新しい視点」から問題を発見してもらいたかったが、難しかった。そのため、どのような日本人や日本に住んでいる人と交流したのかが気になった。そこで、日本人ボランティアにも参加をしてもらい、教室活動に参加する日本人を増やすことにした。

学習者が日本の問題を探そうとよりよいアイデアを出すためにグループワークを行った。しかし、グループワーク自体が目的化してしまったように感じた。日本の問題についても学習者は自分の問題としては意識しているが、日本に住んでいる人にとっての視点では考えることが難しかった。また、教室での教師は学習者にとってのステレオタイプや「唯一の答え」となってしまう場合が多いため、日本人ボランティアが参加すると変化があるか期待した。しかし、答えを出す「教師」が増えただけになってしまったと感じていた。

学習者が日本に来ることが決まり、「社会に関わる意識」は日本に来るだけで変化があるかについて気になった。学習者は課題について発表をし、発表としては上手にできたが、果たして「日本社会に関わる」という意識はずっとあったのか気になった。今回の実践ではある程度、学習者に社会に関わる意識はあったと考えている。しかし、授業の後半になるにしたがって、「発表すること」がメインの活動になってしまったと感じていた。

フィールドノートからも、担当教員も、学習者も、最初は「社会に関わる」意識は高かったことが分かる。しかし、後半からは担当教員の工夫が学習者の「社会に関わる」意識には反映されなくなった。これは、「発表すること」が活動のメインになってしまっているからと担当教師は考えていた。また、教室に日本人ボランティアが参加したとしても、新しい教師が増えただけで、日本人の多様性を気づかせるには十分ではないことが分かった。そして、オンラインではなく、日本に住んでいるだけで「社会に関わる」意識は変化するのかという疑問を担当教員が感じていたことも分かった。そして、今回の実践では「社会に関わる」意識を最後まで学習者に持たせることができなかったことも明らかになった。

4-5 結果と考察

「授業用 PPT」、「学習者のジャーナル」、「実践者のフィールドノート」の分析からは以下の3点が明らかになった。①授業回数が進むにつれて、学習者の社会に関わる意識は低くなっていった、②その原因として発表が影響を与えている可能性がある、③教室活動では日本人との交流はあまりなかった。

これらのことから考察すると「発表」自体が、担当教員にとっても学習者にとっても「社会につながる」意識を持ち続けながら活動をするのを妨げていた原因になった可能性がある。学習者にとって教室活動の成果として行う発表が一番大切なもので、発表することに意識が集中しすぎ、「社会につながる」意識がなくなってしまったと考えられる。これは、佐藤・熊谷(2011)が述べている、「教育機関の中で多くの学習者がテストの点数や成績を意識している」ということが改めて明らかになった。社会につながることを意識されていたとしても科目としての日本語の授業では、活動の過程が担当教員に「評価」されていることを学習者は意識しながら課題を行っていた。また、教室外の日本人が参加しても新しいステレオタイプを学習者は認識するだけで、そこから日本人の多様性を感じることは難しいことも分かった。

この3つの観点からの分析によって、学習者は本当に「社会に関わる」意識を持ちなが

ら課題に取り組んでいたのかという疑問を持った。また、教室活動で学習者が実際にはどのような意識があったのかより細かい点についての調査が必要であると感じた。

5. アンケート調査からの学習者の社会に関わる意識

5-1 調査の概要

実践の省察を行い、学習者に社会に関わる意識があったのかに疑問を感じた。また、学習者がどのような意識を持ちながら課題に取り組んでいたのかという点についての新たな疑問も生まれた。そこで、授業終了後に学習者に対して Google Forms を使用し、アンケート調査を行った。アンケート調査の項目は、教室活動を振り返り、具体的にどのようなことをしていたか、どのように考えていたかを明らかにするために表 4 の 8 つの質問を設定した。アンケート調査では、34 名中 33 名が回答し、回収率は 97% であった。

表 4 アンケートの内容

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①日本に住んでいる人と情報交換をしたか。②調査をするときの情報源は主に何だったのか。③実際に日本に住むことを意識していたか。④実現性を考えて提案をしていたか。⑤誰に向けての発表だったのか。⑥発表の目的は何だったのか。⑦オンラインでしたことで活動に変化があったと思うか。⑧日本に住んでいないことで活動に変化があったと思うか。 |
|--|

5-2 分析と考察

①情報交換について

教室活動では日本についての問題を日本に住んでいる人や日本人との交流から設定することを試みた。学習者はどのような人たちと交流をしていたのかを明らかにするために調査を行った。しかしながら、実際は学習者はそのような交流を通じて問題を設定してはいなかったことが調査結果(図 1)から分かった。多くの学習者は日本に住んでいる人や日本人との交流をしないで、日本の問題を設定し、それを解決しようとしていた。また、交流を通じて問題を解決しようとした学習者は身の回りの日本についての情報を持っている人々との交流を行っていたことが分かった(表 5)。

この結果から今回の課題については多くの学習者は交流しないで、自分の知識や経験などから問題を発見していたのだろうか。どうして交流をしないで問題の設定をしたのかは今回の調査からでは分からなかった。このように学習者自身の知り合いとの交流から教室活動をすることは望ましくないことが分かった。ただ、「交流した人」の結果からも分かるように、掲示板やチャットなどで実際の知り合いではない人との交流からの情報を得ようとした学習者もいた。これは今後の教室外の人との交流の方法としても有意義な方法ではないだろうか。

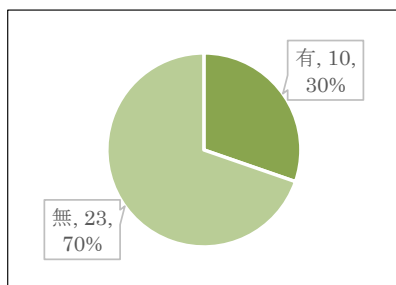


図 1 日本に住んでいる人や日本人との交流

表 5 調査時に交流した人

日本人
・友人 (5 人)
・先生 (3 人)
・知らない日本人 (6 人)
中国人
・日本にいる友人 (7 人)
・大学の友人 (2 人)
・先生 (3 人)

②調査の情報源

学習者は、活動での調査をするうえで、どのようなリソースを使用していたのだろうか。そこで、日本社会の問題を考える作業で「何を使って」考えたか尋ねた。質問への回答は複数回答可で、全部で 56 の回答があった。それを図 2 の通りに 4 種類に分類したところ、一番多かったのが、「インターネット」からの情報であった。回答した全ての学習者が「インターネット」からの日本についての情報を調査の際に使用していた。また、「自分の経験」も 20 名の学習者が参考にしていた。その他、「チャットからの情報」と「本」からの情報がそれぞれ、2 名、1 名だった。

日本についての情報は教科書や本ではなく、インターネットからのものが多かった。これは、生活の中で調べることをインターネットですることが多く、教室活動の課題についても比較的インターネットで調べやすかったからではないだろうか。また、来日経験がある学習者が多かったので、自分自身が体験したことから問題を見つけようとしたのだろう。チャットでの情報についてはインターネットからの情報に含まれるかもしれないと考えたが、「人との交流を通じての情報」と考えたために別のカテゴリーとした。①の質問で人との交流があったにも関わらず、「人」のリソースを使用して調査した意識はあまりないことが分かった。

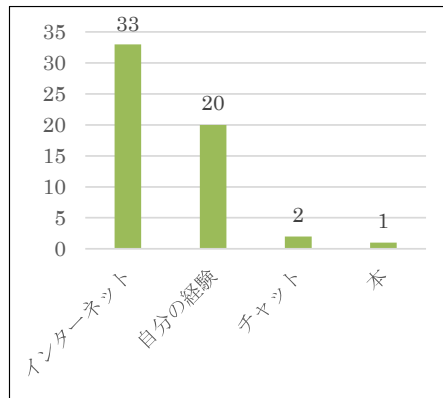


図2 調査の情報源 (33人)

③日本に住むことの意識

今回の授業では「実際に日本に住むこと」を意識して課題に取り組むように説明をした。日本に住んでいないのに「日本社会に関わる」には「日本に住むこと」を意識しながら活動を行う必要がある。アンケートの調査の結果を見ると、実際の授業では日本に住むことは意識されていたようである。これは学習者は未入国留学生であり、日本に来ることを前提として授業を受講していたからであろう。また、対面授業は2回しか実施することができなかったが、実際に来日することができたこともアンケートの結果に反映されたのではないだろうか。

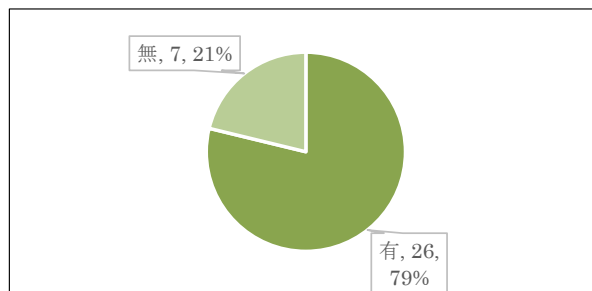


図3 日本に住むことの意識

④実現性の意識

今回の授業の一週目で、日本で生活をする一市民として、日本を自分自身と直接関りのある日本社会として捉えることを意識してほしいことを伝えた。また、「留学生の視点から日本に提言する」際には実現可能かどうかもある必要があることも伝えた。そこで、学習者が発表した内容について、現実性を意識して内容を考えたのかを知るために、「日本社会に実際に提案してみたいか」という質問をした。この質問の回答は約半数が「提案したい」と答えた(図4)。このことから学習者が考えた「日本社会についての提案」は学習者にとっては現実的な提案ではなく、実現性の意識という点ではあまり高くなかったことが分かった。

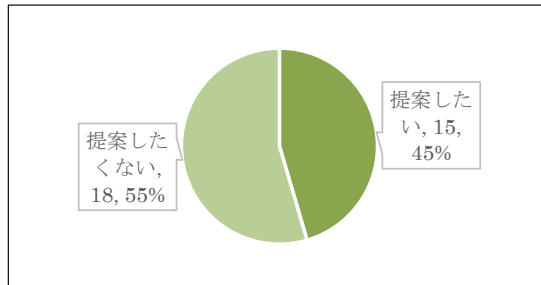


図 4 現実性の意識

⑤発表の対象

この授業は社会につながることを目指して行った。そのため、学習者が留学生の視点から問題を解決する方法を社会に発信する必要がある。そこで、発表は「誰」を意識していたかという質問を行った。回答は複数回答可で、全部で 61 の回答があった。回答の結果（図 5）を見ると、発表は「先生」、「クラスメート」に対して行われていた。日本人という回答もあったが、10 名と少ない回答だった。

発表自体が社会につながることを意識するうえで妨げになる可能性があることが省察からも明らかになったように、「発表をすること」はクラスでの最終的な活動になりやすいのだろう。授業では社会に関わることを意識しながら発表をしてほしいと説明したが、発表の対象となると日本に住んでいる人とはなりにくいようである。今回は日本人ボランティアの A さんがいたにもかかわらず、「日本人」という回答が少なかったことから、学習者は日本社会をあまり意識していなかったことが分かる。「発表をするという活動」が教室内での活動になってしまうということがこの結果からも明らかになった。

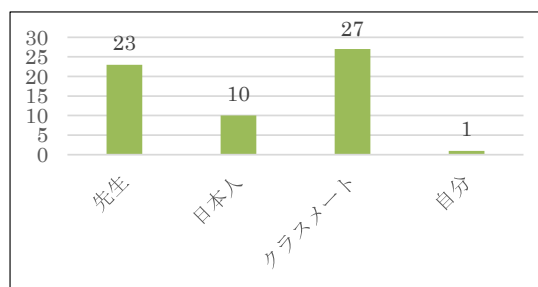


図 5 発表の対象（33 人）

⑥発表の目的

自由記述で「発表の目的」についても質問をした。結果をカテゴリーに分類すると「日本語・発表の能力向上」が 18 名、「興味・関心を解決」が 8 名、「社会に関わること」が 8 名、「特になし」が 2 名だった。目的の多くは「日本語能力の向上」や「発表の技術の向上」

であった。「社会に関わること」が発表の目的と考えられていた回答は以下の5つであった。

- ・旅行の場合、道端に公共のゴミ箱がないのは不便です。外国人が公共のゴミ箱がないことを知らないと困ります。
- ・自分が生活の中でこのような不便を発見したので、もっと良い解決策があるのに、政府はどうしてしないのかと思った。
- ・トラブルを減らし、人と人の距離を減らすため。
- ・不便さを実感しました。この不便さが改善されるかどうか検討したい。
- ・日本で住んでいる間に、中国との違いによって不便が感じました。「これについて、やっぱり中国のほうがいいかなあ」と思い、情報を集めて発表を行いました。

これらの回答から、日本の社会について学習者が自分の問題として取り組んでいることが分かる。ただ、このように日本の社会に関わる意識を発表の目的とした学習者は少なく、個人の日本語能力の向上や発表の技術が目的であったことが分かった。これはこの科目が日本語の科目であったことにも関係があるだろう。

⑦オンライン授業について、未入国での授業について

今回の授業はほぼオンラインで行われた。そこで、オンラインでなく、「対面で授業していたら社会につながる意識に何か変化があったか」という質問をした。オンラインでも対面でも「特に変化がない」と感じた学習者は3名だった。「変化があると思う」学習者の回答は「日本語の能力に関すること」、「発表に関すること」、「コミュニケーションに関すること」、「成績に関すること」であった。この解答からは、「社会に関わること」での違いは特にはないことが分かった。対面でこのような授業を行うことによって、学習に関しては変化はあるかもしれないと考えているが、社会に関してはあまり意識していないことが分かった。

また、「もしこの授業を「日本」でしていたら何か変わったと思うか」という質問に関しては、「特に変化はない」と回答した学習者が10名だった。ただ、社会に関しての関わり方には変化があっただろうと答えた学習者は多く、以下のような回答をした。

- ・日本についてもっと全面的に知ることができます。
- ・資料の探すことが簡単になると思います。
- ・実感があると思います。そして、もっと具体的な提案ができます。
- ・自身が現場で調査できるになるともっと上手くできると思う。
- ・日本社会に対する理解が深まった。
- ・実際に日本人にご意見を聞くことができます。
- ・日本についての感じが深くなったし、考え方や生活習慣が変わります。
- ・課題に関する結論も提案に対する分析がより正確です。

やはり日本で生活をしていない状態で具体的な日本の問題を発見する作業は難しかったようである。自分自身の体験や知識から日本の問題を発見し、その問題を周りにいる日本人や問題を共有している留学生との交流を通じて、より具体的な問題の解決をするために

は実際に日本での生活が必要なのかもしれない。ただ、日本に住んでいなくてもある程度は調査ができると考えていた学習者もいたことが分かった。

5-3 調査の結果と考察

今回のアンケート調査から明らかになったのは以下の5つの点である。

- ①日本の情報は主にインターネットから得ていた。
- ②「日本に住む」ことは意識されていた。
- ③教師やクラスメートという教室内の人に向けての発表を意識していた。
- ④発表の目的がプレゼンテーションの技術の向上や日本語能力の向上だった。
- ⑤日本で授業を行っていたら「社会と関わる」意識は高かった。

本実践では、オンラインでの授業だったこともあり、学習者はインターネットでの検索に頼り、実際に日本人や日本に住んでいる人との交流が少なかった。また、学習者は「教室活動」や「発表すること」に対しての意識のほうが「社会につながる」意識より強かったことが明らかになった。今回の実践が大学の日本語科目ということもあり、評価されることを学習者が意識してしまうのは仕方がないことであろう。ただ、日本に住む意識もあったために、日本の社会に関わる意識はある程度持ちながら発表に取り組んでいた学習者もいたことが分かった。また、日本に住むことで「社会につながる」意識は更に高くなるのではないかと考えている学習者もいた。

おわりに

今回は、オンラインでの「社会につながる日本語教育」での課題に対する学習者の意識についての調査を行った。学習者は教室活動での課題についてどのような意識を持ちながら取り組んでいたのかを明らかにすることができた。

学習者の意識は教室での活動についての意識のほうが社会につながる意識よりも強かったことが明らかになった。学習者は教室外の人々や社会と関わり、調査したりしたが、それは教師に評価されること、単位をもらうこと、日本語能力の向上などが主な目的であり、「社会とつながる」という意識はあまりない学習者が多かった。つまり、教師が設定した課題と学習者が考えた課題には乖離があったことが明らかになった。一方、オンラインでは日本社会に関わるのは難しいが、このような教室活動を通じてある程度はできることも明らかになった。これは、今までは難しいと考えられていた海外での「日本社会につながる教室活動」の可能性も示唆している。

今回は学習者の意識についてインタビューでの調査を行うことができなかった。学習者がどのような意識で課題に取り組んでいたかをより詳細に明らかにするためには学習者に対してのインタビュー調査が必要である。今後はインタビュー調査を中心に学習者の社会に関わる意識の調査を行いたいと考えている。また、社会につながることを学習者の意識の中心に置くためには、発表の方法や評価の方法を変えなくてはならない。そして、「社会に関わること」についても具体的にどのようなことを定義する必要がある。学習者の意識を「社会につながる」に向けてのためにはどのような教室活動を実践するかを今回の調査で明らかになったことから考察したいと考えている。

注

- 1 日本の大学に入学したが、来日できないということで「未入国留学生」とした。
- 2 外務省ホームページ「査証の制限等について」（2020年3月18日）
https://www.mofa.go.jp/mofaj/ca/fna/page6_000379.html（2021.12.3）
- 3 文部科学省「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ&Aの送付について」（4月21日時点）https://www.mext.go.jp/content/20200421-mxt_kouhou01-000004520_7.pdf（2021.12.3）
- 4 中国の大学で2年間日本語を専攻し、その後北陸大学で専門を学び、卒業時に中国の大学と北陸大学の両方の学位を取得できるダブルディグリープログラム
- 5 個人旅行や短期留学プログラム

参考文献

- 木下直子(2021)「オンライン授業における学びの場づくり」『早稲田日本語教育実践研究』9, 59-60.
- 佐藤慎司・熊谷由理(編)(2010)『アセスメントと日本語教育 新しい評価の理論と実践』くろしお出版
- 佐藤慎司・熊谷由理(編)(2011)『社会参加をめざす日本語教育 社会に関わる、つながる、働きかける』ひつじ書房
- 當作靖彦(2013)『NIPPON 3.0の処方箋』講談社
- トムソン木下千尋(編)(2016)『人とつながり、世界とつながる日本語教育』くろしお出版
- 西俣(深井)美由紀・熊谷由理・佐藤慎司・比枝恵子(2016)『日本語で社会とつながろう 社会参加をめざす日本語教育の活動集』ココ出版
- 范一楠(2021)「調査発表型オンライン日本語授業におけるグループ作業と個人作業の比較 -課題遂行利便性と学習効果の学生自己評価結果から-」『環太平洋大学研究紀要』18, 163-168.
- 福島奈緒美・石川晶子・平田真理子(2021)「オンライン授業に対する学習者の意識調査 -日本語学校を対象に-」『日本語教育方法研究会誌』27(1), 142-143.
- 福良直子(2021)「同期型・非同期型併用による上級日本語教育の実践：学部留学生を対象とした「総合日本語」の授業の振り返りから」『多文化社会と留学生交流』25, 47-54.
- 藤本かおる(2019)「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究 -担当教師へのインタビューを中心に-」『日本 e-Learning 学会誌』19(0), 27-41.
- 藤本かおる(2020)「コロナ禍における授業のオンライン化に関する日本語教師の取り組み -オンライン授業の実践に関する教師へのアンケートから-」『2020年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 348-353.
- 細川英雄・尾辻恵美・マルチェッラ, マリオッティ(編)(2016)『市民性形成とことばの教育』くろしお出版
- ニッポンドットコム(2021)「日本に入国できない留学生 2万7000人の悲痛な叫び」
[https://www.nippon.com/ja/in-depth/d00725/\(2021.12.5\)](https://www.nippon.com/ja/in-depth/d00725/(2021.12.5))
- 日本語ジャーナル(2021)「入国制限措置により来日できない留学生の声」<https://nj.alc-nihongo.jp/entry/20210701-ryugakusei> (2021.11.30)